

守護神 ゴーレス

第8話 後編
『祖父と僕達の物語』
WONDEROUS STORIES

作：みかつきなお

守護神ゴーレス第8話 後編

『祖父と僕達の物語』 Wondorous stories

作業が必要だ。人とロジックとセオリーがそろつてしまつた。

そして彼らは成し遂げてしまつたのだ。やはり鍵はモノリスである王家の石板か。龍の眼なのか」

桜は津堅島のニューロコンピューティング研究所から帰る準備をしていた。デスクの小佐田氏から声がかかった。
「桜君。我々はゴーレスのチームと手を組むためにお互いの情報を交換する用意がある。我々には独立した決定権がある団体だ。だが、オノゴロのヴァージョンアップが統括委員会からの課題だ。

ゴーレスのホストIL（擬似生体）CPUであるウムイン

システムのILナーバスは粘菌状、いやクラゲのような形質を示している。さらにウォード粒子を内包した『意思塊』分子によつて構成される『モノリス』をいわばハードディスクとしている点においてすでにヴァージョンアップされたオノゴロと同じなのだ。逆に技術提供をお願いしたいくらいだよ。」

「だめです。彼らの技術に干渉してはいけないです。」

「そもそもゴーレスが成立しうる確立は天文学的確立だ。

葦原茂敏の設計図だけではなく、巫術師による鍊金術的

「すでにオノゴロシステムはウォード粒子と地震の関連性を観測できる方法として認知されている。南日本地震研との共同作業でもあるんだ。サンブルによる実験から決定事項だ。」

触れてはいけない精神世界の作業に桐丸は手を出している。しかしユーリ・オシタノフのウォード粒子、ニーナ・アルナツクスのソリュート理論。シャーマニズムと物理学の融合が進んでいる。わからないものに手をだしていることはたしかなのだ。

これからはそれらを理解するための作業ではないかね。」

「わかりました。でも彼らは巻き込まない事を約束してください。」

「大丈夫だ。お互いにリスクを持つている。不安要因のあるシステムということははつきりしている。

だが一般人である彼らはいつそ我々にすべて譲渡するという手もある。そこが彼らと我々の違いだよ。」

二人は実験建屋の3階から超純水に浸かったトコタチを見た。

「私が学生のころ発掘したものがこれだけ重要なものになるととは。」

三重県神島。伊勢湾に浮かぶ孤島。ここでこれは発掘された。

平らな石板、縦3.5m 横1.55m

幅30cmの石は弥生時代終末期から古墳時代前期の石棺墓の一部として使われたと思われる石。石に見えるが、あくまでこれが石として定義できる物体であればそう呼べる仮称である。

当時の発掘の目的も桐丸系列企業の工事関連の緊急発掘であったが、小佐田も宇都宮もこれが桐丸上層部が狙いを定めて行つた作業であると確信している。そしてこれが特異な分子構造を持つていたということも偶然とは思えなか

った。だが末端研究機関である彼らはグループ全体の流れを把握は出来なかつた。彼らはこの物体をいかに活用するかが問題なのだ。そしてこれが最高決定機関賢人会議からの作業予定。

「もうそろそろいくのか。」「はい。ここは遠いですから。」

桜の目の前には培養水槽に浮かぶ虹色の影が広がつていた。

「オノゴロの精よ、月曜に会いましょう。」

クラゲのような影はエレベーターに向かう桜を追いかけような動きをした。

桜の車は本島へ向けて中城湾海中道路を抜けていった。

同じころ、島根県出雲市に橋武丸は來た。夕暮れの出雲大社で若い神主と会うために。

「大水方（おおみなかた）神社禰宜諸岐水都（なぎさきみなど）君、近くの神社とはいえ御足劳だったね。橋製作所社長橋武丸だ。アルバイトをしてもらいたいが。」

嫌味にならないほどの笑顔をたたえた20歳前後の青年。長身で長髪を後ろで結んだ袴姿の男はすべてをすでに理解していた。

「橋さん。『赤紙』はすでに受け取っております。生で出

会っている間にできることをしようとは思いませんか。」

「やつてみな。」

人影の見えない拝殿前にたたずむ橋は次第に視点が上に

上がっていくことに気がついた。まさか……。

「私達が立っていた場所は昔の出雲大社の柱があつた場

所。今、昔ここにあつた『柱』を再生中ですよ。」

「お、おい。だんだん高くなっている！　どうすればいい

い！」

半透明の氷のような直径1m35cmの円柱に乗っている橋はへたれて膝をついた。空中に足をはみ出した状態で不安になつた。

「もうすぐ千年前、本来の柱の高さ40mになります。そしたら本殿と階段をつけましょう。」

「わかった。お前の力はわかつた。」

「いや、この高さで話をしたいのです。」橋も腹をくくつた。クライアントがこうではない。

風が強く吹き、所々残雪の残る境内。現在の社殿を見下ろす高さ。

三本の円柱が束になり、全高48mの高層建築をささえていた。発掘によつて見つかった柱によつて48mの高さとい

う伝説が史実にかわつたのだ。

柱の上で橋は立ち上がり桜井に命じた。

「橋花のパイロット、そしてまたあの自然誘導の実験をお願いする。」

「おやおや、橋花の件、部品製造の仕事だけでなく操縦も依頼なさるのですか。」

「守護神計画。ゲニウスプロジェクトはゲニウス2に移行する。ゲニウス3となる前に軍隊を組織しなければならない。ゲニウス2の口火は天変地異の不安だ。それを行うには靈的指導者が必要だ。君の力が必要なのだよ。」

「ははは、私の力を過大評価しないでください。でも、あの10月の沖縄南城市の事件、水中に壁を作る技。あれは

いつも練習でやってることです。巫術師ならば悪意との対決をするため防御の技は心得なければなりません。」

「さすがだな。」

「古事記で『八重垣つくる八重垣にその八重垣を』と歌われた技のとおりです。彼らも我らと同じ『神の血筋』でしょう。もしくは前世で一戦交えた間柄。技の作り方なんか似てるんだよね。」

「彼ら沖縄の巫者は神の魂をあの機体に取り入れた。仕上げとして神の魂を機体に込める仕事も必要だと言つておこ

う。」

「もちろん、全部了解ですよ。魂を込める技、兼光さんには依頼しないところをみると統括委員会ではなくあなた個人からの依頼ですね。」

「ああ、兼光は結局沖縄人だ。日本全体よりも琉球王国の安定だけを願っているわけだ。沖縄を捨石にする作戦など彼には出来ない。」

そして彼のイヒカの成功によって一番重要なことが最近わかつたのだ。機体を作り出した者とバイロットはなるべく同一人物の方が相性がよい。そして魂寄せした守護神とバイロットの魂との共鳴のようなものが必要だと。

お前が神の血筋を持つならば魂も特別。神を召喚する儀式の場を用意する。日本中何処でも一時的に場所を占有する準備はできる。我々が保障する。

その優遇で兼光は『熱田神宮』というとんでもない要望によつてイヒカを召喚した。お前は何処を選ぶ。」「そんな仰々しい場所でなくとも天と地と時はおのずから神のお召しになる場所を与えてください。時はもうすぐ。召喚の儀はこの冬もつとも寒くなる頃まで待つて欲しい。」「自然にまかせるか、敬虔な態度だな。では神を呼ぶこと

はお前に任せる。

そのための古い委任状を用意する。70年前のものだ。」

次第に暗くなる海を見ていた渚岐水都は橋を指さす。
『結局祖父と同じ仕事をさせるのですか。『神宮特別神事旅団』巫術師の集団を。これは人を治めるための力であつて暴力の方法ではありません。』

「すでに旅団の人員もそろつている。あの実験で君も間接的に大量殺戮に関わっているではないか。暴力に加担しているのだよ。」

「……それは自然現象、神の行いでしょう。いずれ起ころべくして起こつた自然現象を人は止められません。」「まあ、若い君に責任は問わないさ。戦争は起こさない。『過ちは繰り返しません。』という反戦のスローガンの通りだ。」

我々があやまつた方法で国民を苦しめることはない。だが、いざれ来る敵と対峙する力を備える。そういうことだ。

まあ詳しい話はまたおいおいするとして。……もうそろそろ降ろしてくれないか?」

「ハハハ、いいですよ。」氷が解けるのを早回しにしたよ

うに彼らの足元は急に下に下がって行き、渚岐は橋の前に立ちふさがった。

「一番重要なことを聞いていなかつたようです。『扉』を使つてもよろしいのですか?」

「扉の出口を間違えなければいい。その答えでよろしかな。西洋文明の極みたるハイエストに『扉』を先に使われるのが脅威なのだ。」

「わかりました。早くできるよう努力します。しかし天の時を我々は知ることはない。神の御心に従うまでです。」

今日子はメーリングリストに投稿された舜とみずきの文面を見ながら、一つの文章にまとめた。

この巫術の力を公開する日が来る。その時のために。このことをまとめておこう。

人間だれもが持っている『かんなぎ』の力。巫術は人の心の可能性。

舜が悩みを解決したことだけでもとても意味のあることだった。

私は後世に彼の心の気付きを遺したいと思う。

みずきの文面。

私が沖縄に来た8月。みんなが集まつた時に、顕龍・零式を作ろうとみんなが言い出した。

「だからだろうか。裕一からだと思う。」

オジーの作ったエンジンをそのまま搭載する案を考えると相当量の部品が必要だった。

そして再現するための最大の問題、振動緩衝材、装甲部表面などの多くの部品の素材が不明だつた。部品には材料名の代わりにこの言葉がつけられていた。

謎の言葉、『これは心より作り出せ。言葉より出でるものを作れるものにしか作れない。』

舜はその言葉の意味に気がついていたがなかなか言い出せなかつたといつてた。

その時幸賢オジーが私が持つてきたおじいさんの軍刀を取り出した。

「葦原茂敏の刀は折れたが、上運天哲一と八幡幸賢と葦原茂敏の力で折れた刃を再生できた。」

哲一さんが無から刀を再生させ、わしが表面を本物とたがわない刀に変化させた。この力こそ『心より作れ』と記された部品のことではないのかね。」

「僕の力なら同じことができる。」

その言葉を聴いてみんなが見ていた不思議な夢が現実かもしれないことを思い出していたんだ。
私は茂敏お爺さんほど強くない。でも同じ力があるのなら私は強くなれる。私が受け継いだこの力の秘密を知りたい。

舜の文面。

あの時は言いたくてたまらなかつた。

僕の右手が作り出す技と同じことを祖父ができた。

僕は世界でたつた一人ではない。

今まで生きてきて悩み続けたこの力が現実に存在するんだ。

この右手にお爺さんと同じ力が宿っている。お爺さんの魂が僕に宿っているんだ。

そう思つて涙をこらえながらみんなに言ったんだ。

「僕の力なら同じことができる。上運天哲一は僕の中で生きている。僕はおじいさんの孫だから。」

幸賢オジーは大きく頷いて声をかけてくれた。

「ああ、そつくりだからねえ、頑固なところといい。涙もうろいところといい。オジーはある力を私は見たいよ。舜君。」

しばらく泣いて言葉がでなかつた。みんな優しい言葉をかけてくれた。

「今から見せるよ。」

僕は右手の上に球体を作つた。

そして幸賢オジーが球体の上に手をかざした。

「この方法はひさしぶりだねえ。」

半透明の球体が金属の輝きに変わつた。右手が重くなつてきて、金属の球体に変わつた。

「オジーも家族にみせたことはなかつた。舜君と同じ気持

ちだよ。どうね。」

ついに賢者の石をこの手にした瞬間だつた。

「幸賢オジー。ありがとう。」

今度は涙よりも嬉しい気持ちがこみ上げてきたんだ。

二人でこれを作り上げた。もう僕一人の力ではない。

幸賢オジーはこの球体を持ち上げてみずきに渡した。

「みずきちゃんが葦原茂敏の力を持つていてしたらこれを『本物』にしてほしい。」

みずきの文面

私に何が出来るのだろうか。本物にするって？

「時間が経つとこれは消えてしまう。今となっては本物にすることとの意味さえよくわからん。

ただわしが思うに、こいつに時間を与えるということだ。3次元上に存在する物質はすべて時間を含んでいるんだ。時間すなわち命。命をあたえるという力のような気がする。」

そう言われてこの球体の声のようなものが聞こえた気がする。舜が嬉しい気持ち、幸賢オジーの懐かしい気持ち。これに答えるにはこれは消してはいけない。

時間！それを考えた時に星が見えた。爆発する星、そこの星の屑が固まってまた星になり、地上が出来る。宇宙の時間がものすごい速さで心の中を通過していく。

私はこの幻影をぶりきるよう顔をたたいた。

「気分が悪いの？」小夜子ちゃんが声をかけてくれた。

「幸賢オジー、今はできない。ごめんなさい。」

「気分悪くなるなら無理したらダメだよ。よんなーよんなー（ゆっくり）でやればいいさ。たしかに時間は待つてくれない。でも意味のない時間はないからね。」

意味のない時間はない。そう考えると楽になつた。
「もう少し後で祖父の力の秘密に近づくことができた。

裕一の文面。

オジーの力の秘密を見て俺は納得した。

俺にはこの力が受け継がれている。

「俺もできるよ。今までなんで金属が新品になつたりしたかよくわからなかつたけど。やつとわかつたよ。」

「あ、そうねー。だはずねーと思つてたけどねー。」
舜に笑みを浮かべて対応した時と違つて俺にはそつけない対応。でも俺はこれで満足だつた。舜が苦しんでいたのとくらべたら俺はなんとなくこの技に接していたんだからこれでいいんだ。

みずきは葦原茂敏の力をどれだけ受け継いだかよくわからなかつた。でも統率力のようなもの、シャーマニズムで言う『審神者（さにわ）』の力だということがわかつた。あの時はまだまだわからないことが多い時期だつた。

「これで本当に謎の部品を作つて、あの大型アクチュエーター頭龍を作ることができるだろうか。」

これが大きな課題だった。

でもオジーは笑いながら答えた。

『急がないで作つたらいいさー。オジーは10年かけてエンジンを作つた。葦原茂敏さんが人間に出来ないことを設計図にすることはない。』

そして、これが本当の葦原茂敏の遺言。

『顯龍の設計図をあの黒い制服の憲兵にみせてはいけない。いずれ日本は負ける。戦争からほどぼりが過ぎた頃にうちの妻に聞いて設計図を見て欲しい。そして世の中に役立てることができるならこれを作つて欲しい。君達ならできる。私の子にこの力があるのなら一緒に作つて欲しい。』。

「いやあ。エスニックな料理は好きですから。生春巻きおいしいですね。ははは。」

那覇牧志の幸賢の自宅は11人の八幡アクリチュエーター重機関係者、通称「ゴーレスチーム」の面々が集まりにぎやかな声が上がつていたが、これまでの経緯を桜と貴子に説明するため、反省会という形でいつもの酒は後回しで、メーリングリストに投稿された文を確認しながら久しぶりに真剣に話し合いをすすめていた。

今日子は話を続けた。

「遺言を聞いて後、みずきちゃんは重大な決意をしたんだよね。」

みずきの文面

私は祖父のアクリチュエーター機を作るために沖縄に転校しないければならない。

公立の商業高校の商業科なら転校はたしかにできる。

しかし家を飛び出さなければならないという理由がどこにあるのだろうか。

私は父母に相談した。母は猛反対した。確かにそうだ。

でも、父は不思議な反応を示した。

新年会。ここまでを裕一が朗読したところでコーヒーブレイクが入つた。桐丸重工を辞めた貴子は喫茶店準備のため、そして大事な人に会うためにベトナムに行つたばかり。買い付けたベトナムコーヒーの匂いが部屋を覆つた。

「稻田さんの顔に『コーヒーより酒』と書いてありますよ。」

「お父さんはお前を好きな方向に進んでもらいたいと思つた。

お父さんの会社のコネなんか届かない場所に行きたいというそれくらいの思い切りがついたのなら、新しいアクチュエーター会社の立ち上げにかかわりなさい。その代わりお父さんの会社とはライバルだぞ。おれは手を貸さないどころかお前の会社を買収するかもしれない。それでも戦う覚悟があるなら沖縄に行きなさい。」

いつも淡々とした父がこれだけ語気を荒げたのは初めてみた。

認めてくれたことよりも父の息遣いを感じたのが嬉しかった。海外にてばかりの父が存在感を初めてしめしたようだつた。

そして沖縄に出発する前日、今日子さんに受け渡す荷物、『頸龍』の図面一式を用意した。父が現れて刀を渡してくれた。

「これはさすがに物騒だからお父さんが秘密のルートで運んであげよう。茂敏お爺さんの軍刀だ。」

すこし刀を鞘から出して、鏽びてない本物の輝きがあることを見せてくれた。

「これを何で私に……。」

「お前の祖父の魂がお前を守る。そして葦原家の血を小雪

とお前二人で受け継ぐのだ。」

私は父の言葉に家を出ることの本当の意味を知つた。

私はこれから一人で歩き、いつか伴侶となる男性と出会う。そういう人生の旅に出ようとしていることだということを。

「ありがとうございます。でもこんな大事なものはお嫁に行つた時の方が……。」

「お父さんはいつもお前にあえなくなるかわからない。そしてこの設計図を持っていくことは桐丸グループに対しても反旗を翻すことになる。」

「お父さん、はつきりいって。おじいさんのことと、この設計図、本当は知つていてるのでしょうか！」

父はしばらく黙つてそしてこういった。

「お父さんは本当は知つてている。それはいつかお前に話す。だが私に立場というものがある限り簡単には話せない。お前は私と別の道を行くのだから私の知識さえもすでにお前には関係ないことだ。」

また冷たい態度でわたしを引き離した。せつかく距離が近くなつたというのに。

父をだまつてにらみつづけていると、ぽつりと言つてくれた。

「葦原茂敏は陸軍中野学校出身。日本軍部に深く関わって
いるだけあって有名人だ。子供の頃興味のなかつた、そして
嫌いだつた父の情報が周りからどんどん入つてきました。そ
の大きさをあらためて感じることができた。

同じようく父である私のことをお前も周りから知ること

となるだろう。つまり時間がかかるということだ。」

「わかった気がする。ありがとうございます。」

次の日父は朝早く私の顔も見ずに出かけていった。
母に見送られて私は朝霞の駅に向かつた。

みんな床の間に飾られた軍刀に目が行つた。

ここまで長い時間、今日子と投稿した本人の朗読で時間
が過ぎて行つたことに皆気がついてきた頃だつた。

「では、製作過程の話はまた次回にしましよう。何か質問
のある方は？」

貴子は小さく手をあげた。

「ええと、鍊金術の金属って価値あるものかな……。あ！
ごめんなさい。聞いてはいけないと思つたけど、気になる
んでごめんなさい。」

舜はこういう質問のための用意された答えを言つた。

少し笑いながら冗談っぽいといったほうがいいかな……？

「まず売りたくないですよ。自分の一部ですから。あと詳しい解説は辰巳さんの出番。」

辰巳は立ち上がつた。

「説明しよう！ この金属は地球上では作れないレアメタル
合金になっています。これからレアメタルを取り出すにはおそらく現在の技術では値段以上の費用がかかることが私の試算でそうなっています。我々はこれが外に流出しないように」

みなさんどうもすみません。と貴子は頭を上げずに恥ず
かしそうに答えた。

ここでやつとビールの乾杯になつたが、桜が思い出した
ようにA4のプリントを配りだした。

「みんな忘れたらいけない。来月のお仕事、裕一社長この
プリント読んでみて！」

「『国際通り改造計画』への参入企業さんへの説明会。

ついに入札が通つて国際通り改造の大目玉、三越および
那覇タワー解体の工事に参入することになりました。」

みんな拍手とともに、やつと本物の仕事ができるという
気持ちで一体感が出た。

「乾杯！」

本来の目的である工事参入というところまでこぎつけた喜びは大きかった。

八幡家の一次会は終わり、今日子と桜と貴子と小雪の四人は桜坂のジャズバーで女子会をしていた。

酔いの回った小雪は桜の肩を組んでいた。
「桜ちゃん。やつとお互いの秘密が見えてきたよねえ。」
「はい、はい。もうその件は八幡家で終わったでしょ。もう酒飲みながらこの話はやめ。」

飲めない桜は小雪をたしなめた。

「じゃあ、貴子ちゃん、女子会恒例の秘密暴露！ 菊田さんとベトナムはどうだったの。」

「貴子ちゃん、無理しないでいいからね。」

黙っていた貴子は今日子を見ながら言つた。

「いつていいのかな？」

「うん、あれは知つてる人は知つてるから。」

「あのね、菊田さんの体を見たの。」

落ち着いて話を聞こうとする二人とよからぬ想像をする小雪。

「菊田さん、左手が義手だった。」

はじめてこの事実を聞く桜、そして小雪は酔いがさめる衝撃を感じた。

「菊田さんも左手……。」

「うん、最新の脳波接続アクチュエーター義手。」葦原茂敏と同じ。祖父にそっくりなだけでなく、境遇も近いとは。小雪は頭を叩いて酔いをさまそうとした。

「ごめんなさい。話していいらしいけど、かわいそうだからこれ以上話せない。」

「ごめんね。私がいいだしたばかりに。」

貴子は泣き出した。小雪は貴子の肩を抱きながらあやまつた。

「その話次の機会に私から詳しくしましょう。私達には考える事が多すぎて。」

「よし、今日は貴子ちゃんのために私は飲む！」

「小雪置いてくよ、もう……。」

時間を持てた2人の男の運命がかかわりあつた女性達の運命を変えつつあった。

八幡家では稻田と辰巳はライブハウスに向かう事になり、裕一は舜を車で送ることにした。

去年の9月以来八幡家に厄介になつて いるみずきと同じ高校の小夜子。

いつものようにぎやかだつた居間のテーブルを片付けて、布団を敷いて就寝の床についた。

「ねえ、みずき。やつぱり話たりないよね。」

「うん。でもこれまでよりもこれからなんだと思う。」

みずきは3人の孫がそれぞれに託されたこの力をうまく使つて行きたいと感じた。そしてどうしてもわからないことがある。

葦原茂敏の本当の力。自分にはまだ見えない力があることを。

一つだけわかることは、3人の能力が組み合わされないとゴーレスは生まれなかつたこと。

沖縄の戦場で偶然に出会つた3人、必要な三つの力。その孫に引き継がれたこの力。

『世界革命の阻止』祖父の日記の言葉。

私達は仕組まれた運命なのか。